



TITLE:

木星の御めでた!!

AUTHOR(S):

山本

---

CITATION:

山本. 木星の御めでた!!. 天界 1938, 19(211): 97-101

ISSUE DATE:

1938-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167723>

RIGHT:

## 木星の御めでた!!

山 本 生

木星に衛星が又二つ発見されました。今年の天文学界への大きい御みやげです。——之れで、木星の衛星は、總計十一個になりました。

こんごの発見者は、米國のカリフォルニア州に有名なキルソン山天文臺の名物男 S B ニコルソン博士です。機械は、例の評判の「百吋大反射鏡」を使つたのです。

私は此のすばらしい二衛星の発見のことを、欧州旅行からの歸り途中で、アメリカ大陸を横斷の汽車中で買った新聞の記事の中に始めて見ました。去る八月の二十八日でした。発見者ニコルソン氏は十數年前から互ひに知つてゐる友人なので、私は取り敢へず御祝ひのハガキを出して置きました。九月末、歸朝して、宅に歸つて見ると、コペンハーゲンからも、ハーブードからも此の新衛星

の詳しいニウスが斷片的ながら届いて居ました。之れ等によつて、星の正體は愈々明らかになつて來ました。

ニコルソン氏は今から二十四年前の、西紀一九一四年、丁度、歐洲に大戰争が始まる少し前、木星の第九衛星を發見した功勞者です。私と知り合ひになつた頃は、専ら太陽の觀測をやつてゐましたが、私も其の頃は同じキルソン山で太陽熱の研究をやつてゐたため、二人で能く議論をしました。歳は私よりも一つ若いのでしたが、中々堅氣の、むしろ保守主義者で、新説を手厳しく批評したりする人でした。——それが、近年は太陽よりも、むしろ衛星や彗星等の微光なものを「百吋」で追跡することをやつてゐるやうです。こんどの發見だつて、そうした仕事の副産物らしく思はれます。現にニコルソン氏は、コペンハーゲン回報第七一八號によりますと、去る七月二十七八兩日にわたり、木星の第八衛星を、「百吋」で觀測中、其の近傍に變な微光星を一つ見つけたと報じてゐますが、間もなく其れは小遊星だと知れました。

こんごの二衛星の發見は、七月六日、同九日、同二十七日、同二十八日、同二十九日、同三十日、同三十一日、八月一日、同二十五日等の日に「百吋」の望遠鏡で木星附近の天空を撮影した寫眞の乾板上に見つけられたもので、星の光度は、二つ共に十九等級と報ぜられてゐますから、「百吋」の此の機械でさへ殆んど撮影能力の限界に近い微光のものでありまして、實にニコルソン氏の如き熟練家によつてのみ成功したものと云へませう。――發見の日尙ほ淺く、更に多くの寫眞觀測によつて此等の新星の運動の模様などが判明するのであります。最近までに入手した報告によりますと、こんごの二つの新衛星のうち、木星の西北にあつて、假りに『第十衛星』と呼ばれるものは、軌道が楕圓形で、離心率が八分の五、木星からの平均距離は三千萬キロ米、運動は逆行であることなどが、はっきり判りました。『第十一衛星』の方の軌道は、未だ何も計算されて居りません。

星の發見と言へば、彗星や小遊星の發見の場合だつて、景氣の好いものでは

ありますが、衛星は、大遊星の附屬天體として、學術上にも特種な地位と重要性とを認められ、それに、他に類も少いので、之れを発見するのは、一段と名譽であり、又、學界への大なる貢獻であります。尙ほ、衛星の発見は、いつも、其の時代を劃するに足る學術上の重要な事件であります。

昔、ガリレオは、自製の望遠鏡によつて、木星のまはりに始めて四つの衛星を発見し、之れによつて、天動説よりも、地動説の眞實なる事を確かめました。其の後、間もなく、ハイゲンス、カシニ等が土星にも幾つかの衛星があることを確かめ、更に幾年かして、キリヤム・ハーシエル、ラセル、ホール等が火星土星天王星海王星などに其れ／＼新衛星を発見しました。此等の見事な発見は、発見者の眼の鋭いこと、熱心と、又、機械の優秀なものとに因ること勿論であります。

近年になりまして、バーナード氏が木星の第五衛星を発見した事を手始めに、其の後相ついで、ペライン、メロト、ピケリング、ニコルソン諸氏が木星や土

星のまはりに微光の衛星を発見するに至りました。之れ等のうち、バーナードの発見は眼視力によるものですが、ペライン以來は、皆、強力なる寫眞望遠鏡による発見でした。殊に今回のニコルソンの成功は『百時』に近頃アルミニウム鍍金をした結果によると思はれます。將來、米國バロマー山の新天文臺に、學界待望の『二百時鏡』が活躍するやうになれば、又々偉大なるニウスが飛び出すかも知れません。

今日、『月』又は『衛星』と呼ぶものは、地球に一つ、火星に二つ、木星に十一、土星に十、天王星に四つ、海王星に一つ、知られてゐます。中にも、木星と土星とは衛星の數を多く有つ慾張りの兩大關でありまして、ガリレオやハインゲンスの時代から今日まで、此の二大遊星は、年々競争して衛星の新発見を學界に提供してゐる觀があります。——今までは木星が一つ勝ち越してゐましたが、こんごのニコルソンの成功により、木星に一等を輸した態です。次ぎには、果してどんなに形勢が變るのでせうか？ (二九三八・一〇・三)